ライフ・ライブラリ

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライフ・ライブラリ

【Ｎコード】
Ｎ９６０７Ｓ

【作者名】
ｔａｋｏｓａｓｈｉ

【あらすじ】
人間の人生そのものの記録の保管所、ライフ・ライブラリ。老人ホームで働くルイは、死にかけていた正体不明の少女の人生を「ダウンロード」し、生まれ変わらせ、自分の娘として育てる。カズミと名づけられたその少女は、「２度目の人生」において、自分の特殊な能力に目覚める。いったい私は何者だったのか…？

プロローグ

２２世紀初頭…ある老人ホームにて。

「お誕生日おめでとうございます。キシモトさん」

「ふぁ…」

車椅子の老人と、スーツ姿の肉感的な若い女が、テーブルごしに向かい合っていた。

周りの老人たちは関心があるのか、ないのか、レクリェーションや、茶飲み話に興じている。

「あなたは１０６歳のときに、ライフ・ライブラリへの登録手続きをされています」

「そう…だったかな、ふぁ…」

「医師の判断により、あなたは今後数年のうちに、ご自分の意思による決定が困難になる可能性が高く、本日、２１０２年６月１５日より１か月以内に、強制ダウンロード、もしくは登録削除の決定をしていただかなければなりません」

「強制…？　そっくりそのままか？」

キシモトと呼ばれた老人の眼に光が宿ったように見えた。それまでは、大きく開いた女の胸元ばかり眺めていたのだが。

「そうです」

「もう…少し…考えたいんだよ」

「残念ながら、お考えになる期間をすでに過ぎております」

女はあくまで事務的に言った。

「トシをとればとるほど、忘れたいことばっかりが増えてなあ…」

「それでは、登録を取り消されますか？」

「いや…いや…待ってくれよ」

キシモトは顔の前で両手を振った。目の前に現れた、「ライフ・コーディネイター」通称「死神」に、消えてくれと頼むように。

その様子に気づいた、老人ホームの職員が近づいてきた。
「今日のところは、ちょっと…」
女は立ち上がり、
「あと1か月のうちに、判断なさってください。もし、判断できないときは、登録取り消しはできません」
と言うと、足早にその場を離れた。
職員のルイ・イケダは哀れむようにその姿を見送った。

ライフ・ライブラリ。

それは人類の悲願を達成したかのように思われた。
それは、永遠に生きること。
そして、永遠の平和。

画像、音声、動画だけでなく、その場の空気、匂い、感情まで記録できる「メモリ」が完成したのは、21世紀半ばのことだった。
もちろん最初のうちは、ほんのお遊びにすぎなかった。
しかしそれは、一人の人間の人生そのものを記録できることを意味していた。

「メモリ」の発達に伴い、クローン技術の発達も著しかった。
もはや肉体的な問題を抱えている人はほとんどいない。

つまりそれは、死んでも生き返ることができることを意味した。
クローニングにより再生した肉体に、あらかじめ「メモリ」に記録したその人の「人生」を埋め込む。

その「メモリ」が保管されている場所は極秘とされたが、「ライフ・ライブラリ」と呼ばれた。
人生の図書館。あるいは、保管庫。

ライフ・ライブラリへ登録し、「メモリ」に自分の人生をダウンロードしてもらう。
それは任意とされたが、誰でも登録でき、しかも無料だった。
その当時すでに、貨幣経済は過去のものになりつつあった。
人類にとってのユートピアが現実となる、多くの人々がそう思った。
しかし、そうは思わない、いや、そうなっては困る者もいたのだ…

第一章　ルイ（1）

その日は夜勤だった。ルイ・イケダは事務所で、同僚のケンジ・コウモトとコーヒーを飲んでいた。
「キシモトさん、夕ご飯食べなかったわ」
ルイは頬杖をつきながら言った。
「まあ無理もないさ。引導を渡されちまったんだから」
「あんなに長生きしてても、死ぬことって、イヤなものかしら」
「そりゃ、そうさ。そのためのＬＬ制度だからね」
「ＬＬ…ライフ・ライブラリって、いつからあるの？」
「きみが生まれるよりちょっと前に完成した」
ケンジは、ＬＬ制度により「２番目の人生」を選択した初期の世代だった。だからルイよりも年下だが、人生経験は豊富だった。
「聞きたいんだけど、ホントに前の人生のこと覚えてるの？」
「完全ではないけどね」
「赤ちゃんのころから、妙に分別くさかったりするわけ？　いやだな、そんなの」
「脳が成熟するまでは、前の人生の記憶は蘇らないよ」
「それで、またダウンロードして、生まれ変わるの？　そうやって永遠に生き続ける…」
「さあね。そんなことができるのかな。ただ僕は、今の人生を楽しんでるよ」
「なんか、人生って、安っぽいのね」
「しかしＬＬ制度が出来てから、自殺者は大幅に減った」
それは事実だった。理由はいろいろな学者や宗教家が、いろいろな事を主張したが、どれも決め手に欠けていた。
「いくらでもやり直しがきく、とわかれば、自殺なんて馬鹿らしいし、意味もない。僕はそう思うけどね」
「でも、ダウンロードする前に、死んじゃったら？」

「それは、もう、神様か仏様に委ねるしかないな」
「どうして？　生き返らせてあげればいいじゃない」
「それはＬＬのスポンサーが決めたことでね、禁じられてるんだ」
「結局、そういうわけ？　生きたかったらダウンロードしなさい、ってことね」
「ルイ、きみは確か２１歳だけど…ダウンロードは済ませたかい」
「まだよ。する気になれないの」
「しておいた方がいい。人生、何があるかわからないからね」
「私の人生は、ＲＰＧじゃないわ…あれっ？」
ルイは明かりの消えた談話室の方に、誰かがいるのに気づいた。
「キシモトさんじゃないか」
２人は事務所から出ると、車椅子の上でうつむいているキシモトの方へ向かった。

第一章　ルイ（2）

「あんた達みたいな若いもんには、わからんだろうが…」
キシモトは語りだした。
「おれのように、長く生き過ぎたやつには、人生は敵だ。すべてご破算にしたくなるくらいのな」
「そんな…そんなこと、言わないでよ、キシモトさん」
「おれはもう、人間としてこの世にいたくない。死んだらどうなるのか、神様はちゃんと答を用意しておいてくださっているよ」
「キシモトさん…」
「ライフ・ライブラリの登録を取り消すよ。死神にそう伝えてくれんか」

昼間の女性、ライフ・コーディネイターは、はなはだ不名誉な俗称として、「死神」と呼ばれている。
ライフ・ライブラリに登録した場合、コーディネイターが来るということは、死期が迫っていることを意味するからだ。
キシモトのように、やや認知症の症状が現れ始めると、脳の中のデータが破損し、ダウンロードが困難となる可能性が高くなる。
その前にダウンロードしてしまうか、登録を取り消してこの世を去るか。
どちらか、選ばねばならないのだ。
登録してからダウンロードまでの、「猶予期間」はいちおう、５年間。
キシモトは今年で１１４歳。「次の人生」を拒否した彼が、あと、どれくらい生きられるか。
それは、神のみぞ知る、というほかはなかった。

「おれの女房は生まれ変わったんだ。さんざん苦労をかけたから、

今頃、楽しく過ごしていることを祈るよ。若い体でな。おれとの思い出は、きっと削除しちまっただろうがね」
ダウンロードの際、憶えていたくない記憶は、削除することができる。しかし現在のところは、何歳から何歳までの間、といったような、おおまかなものである。
（若ければ、それでいいの…？　私はいま若いけど、それで幸せ？）
ルイは心の中でつぶやいた。
「キシモトさん、眠れないようだったら、おクスリあげようか？」
「いや、いいよ…もう寝る」
キシモトは寝室へと向かっていった。

「でも、キシモトさん、なんで登録したのかしら？」
「たぶん僕と同じじゃないかな。人間誰しも、オレはこれで終わりじゃない、って思いたいものさ」
「あなたが登録したのは、何歳のとき？」
「それが思い出せない。ということは、強制だったという可能性もある」
「…後悔は？」
「してないよ。でも、2回目のダウンロード、つまり『3回目の人生』を希望した人は、まだ誰もいないんだ」
「…」
「僕がまた年をとれば、わかるかもしれないけど」
ケンジはふと時計を見上げると、
「おや、そろそろ巡回だよ」
2人は日常の業務へと戻っていった。

第一章　ルイ（3）

「お疲れさまー」
ルイは早番の職員への申し送りを済ませ、帰路についた。
ケンジと途中で別れ、いきつけの無人スーパーへ向かった。
ブロッコリー、魚の切り身など、食品を次々とカゴに入れる。その地点で、すでに清算されている。最後に出口を通ると、「電子戸籍」により本人確認が行われ、自動的に銀行口座から代金が差し引かれる。２１世紀の人間が見たら、公然と万引きをやっているように見えるだろう。
「アリガトウゴザイマシタ」
合成音声の挨拶を後にして、ルイは公営住宅へと向かった。時刻はまだ朝の５：３０。人通りは少ない。

いきなり、何かが目の前に落ちてきた。
「きゃっ！」
それは人形のようにも見えたが、すぐに、幼い少女だとわかった。
ルイは一瞬にして、飛び散った血を浴びてしまった。
（な、なに？　どうして…）
頭が混乱したまま、ルイは食材の入った袋を放り出し、少女に駆け寄った。
少女は苦悶の表情を浮かべて横たわり、まだ生きている。
白いブラウスの腹のあたりが血まみれになっていた。
（救急車を呼ばなきゃ…）
ルイはケータイの緊急用アイコンにタッチし、大声を振り絞った。
「誰か来てー！」

（人生、何があるかわからないからね）
ケンジの言葉が思い出された。

「残念ですが、助かりません」
医師がルイに言った。
「どうして？！　死んだ人だって、生き返らせられるんでしょう？！」
「内臓の損傷がひどい。ですが、クローニングは行えません」
「そんな…」
「ＬＬと連絡が取れました。あの子は電子戸籍も、ダウンロードの記録もない」
「ええっ…」
「いわゆる『ゴースト』ですが…生き返ったとしても、メモリがなければ、遺伝子情報が同じだけの別人が生まれるだけです。私どもも、驚いているんですが…」
「じゃあ、今すぐダウンロードしてください。できるんでしょう？」
「もちろん、ダウンロードはどこの病院でもできます。しかし…」
「私が責任を取ります！」
ルイは涙をこぼしながら、医師に訴えた。
ひどい…あんな幼い女の子を、あんなふうに…。

この場合、緊急ダウンロードとなり、医療もしくは生物学の資格を持つ者が、必要と判断したときに行うことができる。

「ダウンロードを始めました。これで生まれ変われます」
「…ありがとうございます」
ルイは全身の力を抜いた。のどがカラカラに渇いていた。
「しかし…これは非常に、特異な例です」
「はい…？」
「あの子には名前も、親もないんです」
「…」
「ルイさんでしたね。あなたが、あの子の母親になってくれれば…」

「…え？」

第二章　カズミ　（1）

「行ってきまーす」
カズミが勢いよく玄関から飛び出そうとすると、ルイが声をかけた。
「行ってらっしゃい。今日も、イサムくんの所に寄るの？」
「うん、ママ」
「迷惑にならないようにするのよ。具合が悪いかもしれないから」
「大丈夫だって」
カズミは、自転車に乗り込み、学校へと向かった。

ルイが、血まみれで倒れていた少女、つまりカズミの前世を救ってから、１５年が経っていた。
母親になってくれ、と言われたときには、正直、戸惑った。
この子には名前も親もない。しかも、殺されかけた。腹をナイフで刺されて。
誰がそんなことをしたのか、いまだに分からない。
いずれにしろ、知らんぷりはできなかった。なにか不思議な巡り合わせのような気がした。
「カズミ」は、交通事故で死んだルイの母親の名前だった。

父親が必要かもしれない、と思ったこともある。
でも、その父親との間に、もう一人子供ができたら…？
カズミと同様に愛せるだろうか。
それに、カズミの出生の秘密を、自分は知らなければならない、という気がした。
だから、すでに３２歳だというイサムと、会うことを許している。

イサムはクローニングのエラーによって生まれた、世界でも数少ない「障がい者」だ。

下半身と、左手が動かず、声を出すこともできないが、知能は異常に発達している。
ＬＬ（ライフ・ライブラリ）にとっても、貴重な研究対象で、多額の年金を受け取っている。

カズミも、とても利発な子だ。２人でいつも何をやっているのか知らないが、ルイには理解できないだろう。
それにイサムは１０代のときすでに去勢手術を受けた。年頃のカズミと過ちを犯すことはないだろう。しかし、いずれは、２人きりで会うのはやめさせなければなるまい。
ルイはふと、自分の思春期のころのことを思い出した。とうとう、長く続いた彼氏、いなかったな…

電話が鳴った。ケンジからだった。
（キシモトさん、亡くなったそうだよ。入院先から連絡があった）
「そうなの…」
（最期まで、ダウンロードを拒んだ。おれの人生はおれのものだって…立派なもんさ）
「そうね。私もまだ、ダウンロードしてないけど」
（僕も、３回目は無しにするよ。なにか間違ってるような気がし始めてね）
「じゃあ、私が生まれ変わっても、もう会えないわけ？」
ケンジの高笑いが響いた。
（その辺のところ…今夜、じっくり話し合わないか？　食事でもしながら）
「いいわね」
たまには、気分転換も悪くない。

第二章　カズミ　（2）

イサムはせわしなくタッチパネルの上で右手を動かし、「会話」を行った。
それは、ベッドの脇のモニターに映し出される。
（たぶん、ぼくとキミは同類だ。だからキミはデリートされるところだった）
「デリート？　ああ、削除、ね。わたし、殺されそうになったって、本当なの？」
（やつらはキミの記録を消して、うまくいったつもりになってる。キミのママが、通りすがりの少女を助けるという可能性を考えていなかった）
「わたしは憶えてないなあ…」
（たぶん、ダウンロードする時、キミのママが消したんだよ。忌まわしい記憶をね）
「イサムは、どうして殺されなかったの？」
（失敗作だったからさ。ごらんのとおり、何の力もないよ。子孫を残すこともね）
「じゃあ、私は…」
（キミは生まれてはならない子だった。やつらにとってはね）
「普通の人とどう違うの？」
（なにか、気がつかないかい？　いろいろ試してごらん）
カズミは、しばらく考え込んだ。
「同じ夢をよく見るんだけど」
（それは重要だ。どんな？）

「あの子、一時、精神的に不安定になって…」
「よくある事だよ。いつまでも、子供じゃないんだ」
ケンジはパスタを口に運びながら言った。

ルイは、ケンジと自分は結婚するかもしれない、とよく思った。
しかし、２人の関係は、友達以上に発展することはなかった。ルイは、その間に自分だけ老け込んでしまったような気がして、一歩を踏み出す気にはなれなかった。
「確かにイサムくんは、カズミちゃんにとって面白いだろうね」
「あまり仲良くなりすぎても困るわ」
「ほかに友達、いないの？」
「いるわよ。でも、イサムくん以外は、女の子ばっかり」
「１５歳だっけ？　そろそろ、異性を意識し始めるよ。大丈夫。今度は逆の心配が待ってる」
「だと、いいんだけど…」
カズミはもう、ひとりの女性なのだという実感がわいて来なかった。ルイ自身が男性を知った歳に近づいている。
「それとね、ルイ、きみはダウンロードすべきだ」
「えっ…どうして？」
「きみにもしもの事があったら、カズミちゃんはどうなる？」
「…」
ダウンロード…人生のバックアップ。
確かに、ケンジの言うとおりかもしれない。今までずっと、自分の中で避けてきた問題だった。
ふと思い当たることがあった。
カズミが、また生まれ変わったら？
３回目の人生、ということになる。ケンジがいつか言っていた。「３回目」を選択した人は、誰もいないと。カズミはどうするだろう。
とりあえず、ケンジの言うとおり、自分のダウンロードはしておこう、と思った。

第二章　カズミ　（3）

ある日の夕食のとき、ルイは話を切り出した。
「ママはね、明日、ダウンロードに行ってこようと思うの」
カズミは頬張っていたおかずを飲み込むと、
「なんだ、ママ、まだだったの？」
平然として言った。ルイは戸惑いを隠せなかった。しかし、カズミにとっては、ダウンロードなど、予防注射のようなものなのかもしれない。
私はカズミのどんな反応を、期待していたんだろう？

「それよりさ、ママに訊きたいことがあるんだ」
「なあに？」
「わたし、前の人生の記憶がほとんどないの」
「えっ…」
「わたし、死ぬところだったんでしょ？　でもママがダウンロードしてくれて、生まれ変われたのよね？」
「…」
「どうして記憶がないの？　前の人生のときの名前、パパとママ、友達…なんにもないのよ」
ルイは驚愕した。腹をナイフで刺される苦痛の記憶を、消したのは確かだ。しかし…
「…うんと小さかったからよ」
「うそ。本当のこと教えて。生まれ変わる前は、わたし、何だったの？」
「ママにもわからないの」
それは本当だった。
カズミは、しばらく黙っていた。だが、急に、
「ママ、あした病院へ行くんでしょ？　わたしも連れてって」

ルイは拒めなかった。この子のすべては、自分に責任がある。
私はカズミのたったひとりの肉親なんだ。先延ばしにしていたダウンロードを決めたのも、そのせいだ。

ルイはベッドの上に仰向けに寝かされ、ヘッドホンを装着された。
聞き覚えのある音楽が流れてきた。
モーツァルトだ。
「ダウンロード中は少し、眠くなります。気分が悪くなったら、すぐにおっしゃってくださいね」
看護師が、ルイの緊張を解くよう、柔らかい口調で告げた。
「では始めます。ほんの１０分ほどで済みますよ」
ほんの１０分？
いってみれば脳の中身を取り出す作業なのに、そんな短時間で済むなんて…
近くのモニターが点いた。横たわるルイの姿が映っている。
（あれが最新の記憶かしら）
「はい。終わりましたよ。ＬＬ（ライフ・ライブラリ）にメモリを送りました」
眠くなる間もなかった。

ダウンロード室を出ると、カズミが待っていた。
「ママも一緒に来てくださいって」

「この子の情報を調べましたが…」
「記憶科」の医師は明らかに困惑していた。
「この子は、アップロードされていません。生まれ変わっていますが、前世の記憶を受け継いでいないのです。おそらくアップロードの際にメモリの中身を紛失したと思われます」
ルイは、驚いたが、安堵した。
最期にナイフで刺されるような人生なんて、消えてしまったほうがいいんだわ。

しかしカズミは違っていた。
厳しい表情で、じっと何かを考えているようだった。

第二章　カズミ　（4）

病院の帰り道、2人はおし黙っていた。
（なにか不正が行われた可能性もあります。ＬＬ（ライフ・ライブラリ）管理法に触れるような…）
ルイとしては、カズミがこのまま普通に成長し、やがて親元を離れ…というのが、一番いいシナリオだった。だが、カズミは、そういう生き方を選ばないだろう。
自分が何者なのか、カズミは解き明かそうとする。それを手助けしてやるのも、親の役目のような気がした。
「ここね…」
2人は立ち止まり、ルイの脳裏に、あの時の記憶が鮮明によみがえった。
「そう…あなたは上から落ちてきたの。でも…」
現場の脇には、建物はなく、広い公園だった。
近くに高い樹木などもなかった。
それでも、確かにカズミ（の前世）は、「落ちてきた」のだ。
しかも、その時生きていたのだから、そんなに高い所から墜落した、というわけではない。
「あの時は、ママは夢中だった。あなたを助けなきゃ…それだけで。とても、どこから落ちてきたのか、なんて確かめる余裕はなかったわ」
（もしかして…）
カズミは、イサムの言葉を思い出した。いろいろ試してごらん、と。
（わたしに、なにか特別な…技というか、力というか）
1台の車が爆音とともに走ってきた。
「わああ！」

それは歩道に乗り上げ、ルイとカズミのいる場所へ向かってきた。
ルイはとっさにカズミを抱きしめ、うずくまった。
人間の反射神経で、よけられるスピードではなかった。
（わたしの体がクッションになって…せめて…）
それがルイの考えたことだった。
車は衝突し、炎上した。

「ママ！　ママってば！」
ルイは目をあけた。
生きてる…？
「ママ！　痛い！」
カズミをぎゅっと抱きしめていたことに気づき、われに返った。
「ど…どういうこと？」
２人は、公園とは反対側の歩道にいた。

向こうがわでは、公園の塀に衝突した車が、すさまじい炎をあげている。
２人は一瞬前まで、そこにいたはずだった。
「カズミ、これは…まさか？」
「わかんないわ。でも、わたしたち、助かったのね」
瞬間移動（テレポーティション）…？

（これがわたしの…特別な力…？）

第二章　カズミ　（5）

翌日、カズミは学校の帰りに、イサムの家に立ち寄って、昨日のことを話した。
（そうか。これで明白となった。キミには特殊な力があるんだ）
「でも、あれから自分で、いろいろ試したんだけど、うまくできないの」
（いずれ、使いこなせるようになるさ。だが喜んでばかりはいられないぞ）
「前世のわたしは、おなかを刺されて、とっさに、あの場所にテレポートしたのね？」
（そう、キミのママには、落ちてきたように見えたんだな）
「いったい何者だったのかしら、わたし」
（答は、いずれ明らかになる。カズミ、キミは、絶対にダウンロードしてはいけないよ）
「…そうみたいね」
（キミはＬＬ（ライフ・ライブラリ）そのものを、敵に回すことになりかねない）
「でも…私は前世の記憶を、アップロードされてないんでしょ？」
（メモリを消去しても、アクセスできなくなるだけで、記憶が消滅するわけではない。それに、キミの特殊能力は、記憶ではなく、遺伝情報に基づいているのかもしれない）
「もし、わたしがカズミとして、生きていることが知られたら？」
（キミは、ママと別れなければならない）
「…えっ？」
（キミはもともと殺されるはずだったんだからね。ママを巻き込んでしまう可能性がある。その時ぶつかってきた車だって、もしかしたら…）
「いやだよ…そんなの」

昨日の車を運転していたのは、ある１８歳の若者だとわかった。
焼死したが、ＬＬに登録してあったので、生き返ることができた。
ルイとカズミは助かったので、単なる自損事故という扱いになり、
新聞にはそれしか書いてなかった。
（もしかして…）
初めから、殺すつもりだったのでは？　ルイは考えた。
ＬＬに問い合わせても、その若者の個人情報は教えてもらえない。
それが生き返った。
（また、来るかもしれない）
ルイは身震いした。しかし、いまは赤ん坊のはずだ。
（脳が成熟する前に、探し出して…）
カズミのためとはいえ、自分に人が殺せるだろうか？

「失敗したか…」
その男は、独り言のように言った。
男が座っているのは、グランドピアノの前。その傍らに、老人が立っていた。
「よりによって、自爆とは…まあ、自殺願望のある者でしたが」
「記録は消したな？」
「アップロードした後、メモリそのものを破壊しました。そのあたりは、抜かりはございません」
「私が引き取って育てよう。ごく、普通にな」
「訓練は…なさらなくてよろしいので？」
「訓練など意味はない。あの子が特殊能力に目覚めた今、どんなプロの暗殺者でも、殺すことはできまい。あの子はごく自然に死ななければならんのだ。へたに武術の達人などが近づけば、警戒されてしまう」
「…さようでございますな」
男は邪悪な笑みを浮かべて、
「それに…子供には子供の人生があるからな」

第三章　ノリユキ　（1）

それから8年後…フリースクール「ミート」にて。
「…というわけで、ＬＬ（ライフ・ライブラリ）管理法は、本当に、にわか作りの法律で、問題がたくさんあったのね。この中で、ダウンロードしたことある人、いる？　いたら手を挙げて」
何人かが手を挙げた。
勉強熱心なツトムが質問してきた。
「ダウンロードばかりしていると、脳に障害をもたらすんですか？」
カズミは答えた。
「理論的にはそういうことはないわ。でも、いまは有料だから、そんなにたくさん、しなくてもいいのよ」
ここ数年で、ダウンロードはより手軽にできるようになり、ＬＬ（ライフ・ライブラリ）管理法も改正され、一生に一度、とされていたものが、何回でもできるようになり、無料だったものが有料になった。
といっても、コーヒー1杯程度のものであったが。
自殺者は減り続けていたが、人生に意味を見出せず、無気力となる者も多かった。フリースクール「ミート」は、そういった人々の集まりであり、２３歳になったカズミは、そこの専任講師として働いていた。
「みんなも、あせる必要はないの。誰もが思い通りに生きられる時代が来たと思って」
ユウコという無気力症の典型の生徒が質問した。
「ずーっと寝てて、ヘヴンばっかりやっていてもいいの？」
「それで楽しければ問題ないけど、あなたはそれがイヤで、ここに来たんじゃない」
「ヘヴン」とはいわば合法の麻薬で、これが開発されてから、覚せい剤、大麻、ヘロインなどの非合法の麻薬は、表面上は姿を消した。現在では誰もがポケットに1、2錠は入れているようになった。

もちろん反対する人も多くあった。
「あれっ？　ノリユキくんは？」
一番の問題児の姿が見えないことに気づいた。
「ちょっと探してくるわ。みんな、自習してて」
カズミは教室を出ると、誰も見ていないことを確認してから、瞬間移動（テレポート）した。

「やっぱりここね！」
「カズミ先生…！」
ノリユキは突然現れたカズミに驚き、屋上から飛び降りようとしたが、しっかりと腕をつかまれてしまった。
「ヘヴン持ってるでしょう。出しなさい。校舎内へは持ち込み禁止よ」
「…」
「あなたって、どうしてそうなの」
「先生も、ぼくも、他の人とは違うんだよ。選ばれた人間なんだ」
「バカなこと言わないの」
ノリユキに特殊能力があることを知ったのは、ごく最近のことだった。カズミは自分の同類として、なにかと目をかけてやっていたが、少々過保護だったようだ。
「さあ、教室へ戻るわよ！」

第三章　ノリユキ　（2）

ノリユキは、わずかだが宙に浮くことができる。本人によると、「泳ぐような感じ」なのだそうだ。

今はまだ「前世」の記憶は現れていない。まだ8歳で、カズミから見れば息子のようなものだ。「ミート」の中では最年少で、自分のことを「選ばれた人間」だと思い込んでいて、生意気だったが、不思議と他の学生たちからも可愛がられていた。

イサムの情報網を使い、8年かかって、ようやく見つけた「仲間」だった。

その日の授業が終わると、カズミはノリユキを施設まで車で送ってやった。

「いい？　明日、来たくなければ来なくていいけど、ヘヴンはだめよ。わかった？」

「はあーい」

ノリユキは2回目の人生における両親が見つからなかった子だ。だから、孤児施設で暮らしている。

カズミは、イサムのところに寄った。

（キミがよく見るという夢だが…ノリユキにもそういう事がないかい）

カズミがよく見る夢とは、グランドピアノの傍に立つ男…どこか懐かしいような雰囲気だった。

同時に、なにやら薄気味悪いものも感じた。

「そういう事は言ってなかったわ」

（そのうち言い出すだろう）

「…どうして？」

（ノリユキの歳を考えてみたまえ）

「8歳にしては、大人びてると思うけど…？」

カズミは首をかしげた。
（キミらしくもないな。ノリユキはキミとお母さんが殺されそうになった歳に生まれている。しかも特殊能力を持っており、両親もいない。これが、どういうことか）
「まさか…そんな…」
（キミはいまの仕事をやめるべきだ）
「ノリユキくんが、わたしを殺すっていうの？」
（それはまだわからない。ただ敵の全貌がわかっていない今、用心に越したことはない。キミはノリユキを殺せないだろう）
「誰だって、殺せないわよ！」
（だが、自分の身は守らねば）
「…」
（ぼくでは、キミを守ることはできないよ）
「いっそ、こっちからうって出るっていうのは、どう？」
（…なんだって？）
「わたしは、記憶にある場所なら、どこへでも瞬間移動（テレポート）できるようになったわ」
（まさか…）
「ということは、前世の記憶だって、いいはずよね？」
（だめだ。危険すぎる）
「いま必要なのは、ＬＬ（ライフ・ライブラリ）がどこにあるか、突き止めること」
（それで、夢の記憶の場所へ？　実在しない場所だったらどうする）
「大丈夫。リハーサルはちゃんとやるから」
（しかし…）
「案ずるより生むが易し、よ」

第三章　ノリユキ　（3）

「ただいまー」
「あら、カズミ、遅かったのね」
ルイが声をかけた。
「ごはんは？」
「いい。食べてきたから」
カズミは、まっすぐ自分の部屋へ向かった。
（変ね…最近、いつもああだわ）
彼氏でもできたのかしら、と考えてみる。一番、男性の目を惹きつける年頃だ。実際、カズミは魅力的だった。もうすでにその若い体に、男性を迎え入れたことがあるはずだった。
（一人の人と長続きしないのも、私に似たのかしら？）
ルイはカズミと自分は血のつながりが無いことも忘れて、そんなことを考えていた。

自分の特殊能力を、秘密にしておくのは、たいへんな苦労だった。
（母さん、わたしは…）と、何度言いそうになったかわからない。
「彼」とたった1年で終わってしまったのも、そのせいかもしれなかった。
イサムのことを考えた。兄のような、友達のような…当然といえば当然だが、男性として意識したことはなかった。
ふと思い出した。今日こそ、成功するかもしれない…
擬似的な記憶しかない場所に、瞬間移動（テレポート）できるかどうか。
カズミは、いつものように、記憶にある場所を強く思い描いた。
すると、今、自分のいる部屋が、ぼやけ始め…

むっとするような熱気。匂い。無数の虫の羽音…
カズミはゆっくり眼を開けた。

ここは…
自分の体をまず、見てみる。ミートから帰った服のままだ。
そして、自分がいま、どこにいるか。
大きな植物に囲まれた、手つかずの自然。
（ジャングル…そうだわ、昨日、テレビで見た…）
それは、熱帯ジャングルの記録番組だった。
（夢…じゃないわね）
ついに成功したのだ。行ったことがなくても、記憶の中にある実在の場所なら、瞬間移動（テレポート）できる。

「イサム！　やったわ！　私、成功したの！」
カズミはジャングルから戻ってくると、すかさずイサムに電話した。
キッチンにいたルイにまで聞こえるほどの大声だった。
（…あの子、何を言ってるのかしら？！）

（そうか…）
イサムは、音声合成装置により、電話に出られるようになっていた。
「これなら、夢の記憶の場所へ、テレポートできるわ！」
（テレポート？）
ルイが聞きとめた。
「カズミ！」
ルイはカズミの部屋をノックした。

「カズミ！　ちょっと！」
（しまった…つい…）
母さんに聞かれてしまった…！
カズミは急に小声になって、

「イサム、いったん切るわね」
カズミは覚悟を決めた。いずれ、この時がやってくる。そう思っていた。

第三章　ノリユキ　（4）

ルイはカズミの手をとり、両手で包み込んだ。
「言いたいことを言わずにいるのは、辛かったでしょう？」
「うん…」
「あのときは、神様が私たちを助けてくださった、って思ったけど、本当は、あなたが私を助けてくれたのね」
カズミの胸にこみ上げるものがあった。
（やだ…どうしてそんなに優しいの…？　母さん）
叱られるかと思ったのに…
「あなたがどんな過去を持っていても、私は、あなたの母親だからね」
「うっ…」
涙がこぼれ落ちた。あとはもう、歯止めがきかなかった。
カズミは久しぶりに、幼児のように泣いた。

同じ夜…

大きな音…これは、車だ。
猛スピードで走っている。そして突然、向きを変える。

あぶない！　目の前に人がいる。若い女が二人だが、片方は、まだ少女といっていい。
車は二人をひき殺そうとする。すると…2人の体が青く光り…
「うわあ！」
ノリユキは自分の声で眼が覚めた。
（また、あの夢だ…）
全身汗まみれだった。
夜中の孤児施設は、静まりかえっている。

ノリユキは、自分の声で誰かを起こさなかったか確かめると、再び眠りについた。

イサムはカズミに一方的に電話を切られたが、満足していた。
カズミの特殊能力は、日に日に高まっている。
（まだ、やつには勝てまい。だが、ありがたいことに、今は死は終わりではない…）
暗い部屋のなかで、電子機器に囲まれながら、イサムはひっそりと眠りについた。

気持ちの落ち着いたカズミは、ベッドに横たわり、闘志をみなぎらせていた。
グランドピアノ…そのそばに、スーツ姿の男…
じっと、精神を集中する。
（母さん…ありがとう。今まで育ててくれて）

やがて…周りの風景はぼんやりと薄れ始め…

カズミの全身が青く輝き、そして、消えた。

終章　シン

カズミが実体化すると、そこは、霧に包まれていた。
（あれ？　失敗したかな…）

しかし、霧は徐々に薄れていき、やがてグランドピアノが現れた。
「驚いたね。もう会うことになるとは」
よく通るバリトン。この声は…！
カズミは声のした方を向き、身構えた。
「おっと…戦う気はないよ。今の君では、私に触れることもできまい」
スーツの男が立っていた。
カズミは早くも、彼の力を思い知らされていた。
（なんてこと…体が動かない！）
「だが素晴らしい成長ぶりだ。惜しいな、殺すには」

「私の名はシン。わざわざ来てくれたわけを教えてくれ」
「わたしを、２度も殺そうとしたわ」
「その仕返しに、私を殺すつもりか。殺して、どうする？」
「ＬＬ（ライフ・ライブラリ）を壊すわ。２度と使えないように」
「おろかな…」

「私も、キミも、ＬＬから生まれた」
「デザインベビーね…クローン操作された」
「ＬＬこそは人類の最終進化だ。そしてそれとアクセスできるのは、私しかいない」
シンは、ゆっくりと近づいてきた。
（体が動けば…）
「われこそは宇宙…われこそは神」

（もう少し…）
「完璧なものは、この世に一つでいい…」
（油断してる…体が動くわ！）

カズミはシンの腕を、渾身の力をこめて掴んだ。
シンは一瞬、うろたえたようだった。
カズミはそのまま、瞬間移動（テレポート）した。

爆音をたてて迫る車。シンとカズミはあの公園にいた。
「ば、ばかな！　まさか時を超えて…」
「道連れよ。覚悟して！」
車は衝突し、炎が2人を包みこんだ。

カズミは、過去に瞬間移動（テレポート）することに賭けたのだった。

（やはり、見つかりませんでしたか）
「ええ…」
ルイが意気消沈して言った。
（カズミは生きています。間違いありません）
イサムの言葉は慰めではなかった。
なんといっても、この世界では、死は終わりではない。

終章　シン（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。続編にご期待ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9607s/

ライフ・ライブラリ

2011年5月18日09時44分発行